

駅の方向に自転車の向きを変え、しばらく行くと「滋賀の水草」に載っている写真とよく似たミクリの群落を発見。ここのミクリは、ほとんどが立ち上がっていた。しかし果実は見られず、残念ながら種類を見極められない。観光地図の知内川と生来川の間に位置するこの河川を、私たちは帰京後にマキノ町役場から送ってもらった地図により、先ほど出会ったのと同じ「前川」と知った。

＜前川のデータ ②＞

川幅	500cm	電気伝導度	69 μ s/cm
水深	86cm	PH	6.5
水温	13度	COD	0
		NO ₂	0.006

周囲は、兩岸とも水田。コサギ、アオサギの姿が多い。上流の方にミクリが途切れ、バイカモ、コカナダモ、ミズハコベ。また、矢川で見られるアイノコイトモより少し葉が広いものもあった。

＜矢川との比較＞

想像と異なり、矢川とあまり類似している河川とはいえず、残念ながら矢川の水草の変化を考察する参考とはならなかった。

水温は矢川より低く、水量も豊か。電気伝導度は格段に数値が低く、水質もきれいであった。上流で一部コンクリート護岸であったが、自然のままの部分が多い。矢川で見ることのできないバイカモが多い要因が何によるのかは、特定できなかった。

＜感想＞

住民の方より聞き取りができたことは幸いであった。マキノ町には流れの数が多く、バイカモやミクリも豊かで、私たちからすると「宝の山」に見えるが、あまりに豊かすぎてかえって地元の方は無頓着のようである。また、あちこちの河川で改修工事が行われていたが、水草をはじめとした生物への影響が懸念される。前川のバイカモやミクリがいつまでも姿を消さないように、住民や行政への啓蒙活動が必要ではと感じた。保全のための啓蒙活動が必要という点では、国立・矢川も同様であるといえる。

○「佐賀県の生物」編集委員会（編）『佐賀県の生物』（1996年8月、388p）

日本生物教育会の全国大会が開催される時には、開催地の自然に関する記念誌が出版されることになっているようだが、本書は第51回大会が佐賀で開催されたときの記念誌である。地元の研究者の長年の研究成果が動物から植物まで集大成されていて立派な佐賀県の自然誌である。

植物に関しては、研究史、植物相や植物群落の概説からコケ、地衣類、藻類などの各分類群に関するまとめまで多岐にわたるが、水草関連では「佐賀平野のクリークの植物」（上赤博文）と「シチメンソウ」（岩村政浩）が興味深い。前者には、代表的な種類毎に現況や変化の様子が詳述されていて、貴重な記録になるだろう。昨年の佐賀での全国集会の見学会のとき、限られた時間で、実に興味深い場所をご案内いただいたが、このような地道な調査の蓄積があったからこそ実現したものだと感じずにはいられない。

植物研究史の中に「現在県内で活動している研究者」という項目があり、19名+アルファの方の紹介がある。

大半は在野の研究者であり、功成り名を遂げた人ばかりでなく、現在活躍中の若い方々が紹介されている。自分たちが、佐賀県の自然史研究を支え、発展させようとしているのだということを感じるとともに、他府県の人間が情報交換をする際にも役立つおもしろい企画である。佐賀県の自然史研究が「元気」なのは、こういうセンスと無縁ではないだろう。

なお、本書の入手をご希望の方は、郵便振替 01700-2-49062（佐賀県生物部会）に申し込まれるとよい。頒価4,000円（送料：1冊450円、2冊590円）。

（角野 康郎）